Japan Society of
Youth and Adolescent Psychology

Newsletter

第 98 号　2026 年 3 月 3 日
発行：日本青年心理学会事務局

■目次

＜第 33 回大会委員長挨拶＞
佐藤 有耕：多様性のリボンを結んで――第 32 回から第 33 回，そしてその先へ――
…… 1
＜特集：日本青年心理学会第 33 回大会＞
（大会参加者より）
土屋 友美賀：初めての学会で向き合った「対話し難い悩み」――青年の性をめぐって――…… 3
滝口 達也：日本青年心理学会第 33 回大会に参加して…… 3
古谷 かすみ：第 33 回大会で得た出会いと学び…… 4
今野 優香理：はじめての学会発表 顛末記――日本青年心理学会第 33 回大会に参加して――…… 5
＜名誉会員挨拶＞
大野 久：私の研究歴…… 5
＜学会賞受賞者挨拶＞
大谷 宗啓：第 12 回学会賞を受賞して…… 7
＜リレー連載「日本青年心理学会（青年心理懇話会，青年心理学研究会）の歴史」＞
齊藤 誠一：出会いの契機としての青年心理学もしくは日本青年心理学会…… 8
＜書評・私のおすすめ，この一冊＞
相羽 美幸：髙坂 康雅（著）　福村出版（2025 年刊）
『恋愛と結婚の心理学――恋愛心理学研究の現在地――』…… 9
＜広報＞
広報・ニューズレター編集委員会からのお知らせ…… 9
事務局からのお知らせ…… １０

＜第 33 回大会委員長挨拶＞

多様性のリボンを結んで
――第 32 回から第 33 回，そしてその先へ――

佐藤 有耕
（筑波大学）

昨年 2025 年 12 月 6 日(土)～7 日(日)に日本青年心理学会第 33 回大会を東京代々木の国立オリンピック記念青少年総合センターにて開催致しました。大会参加者総数は 128 名（一般 78 名，大学院生 34 名，学部生 16 名），研究発表 33 件（口頭 13 件，ポスター20 件），シンポジウム 4 件（研究委員会・日本キャリア教育学会合同企画シンポジウム 1 件，自主シンポジウム 3 件）でした。前日 12 月 5 日には，研究委員会による若葉マーク企画第 4 弾「研究生活を続ける」の開催もありました。

加えて，今井 悠介氏による招待講演『子どもの「体験格差」の実態，その解消に向けた実践』を準備委員会で企画し，多くの会員に聞いていただくことができました。雪の北海道で行われた前回 32 回大会では，加藤 弘通先生が多様性を大会テーマに取り上げ，歴史的問題も含めた多様なプログラムが展開されました。今回のメイン企画に『体験格差』を取り上げたのは，この新しい波に賛同し，この波に乗ることを意識してのことでした。もともと青年心理学は，現実にそこにいる青年のためにありますから，限定された方法にとらわれてはいません。青年の自己理解と主体的な自己形成に役に立つのであれば，どんな方法で研究することも気にしません。調査・実験・面接・観察だけではなく，外でナマの声に耳を傾けることも，日記や手記を分析することも，昔話や物語を解釈して知見を得ることにもこだわりがありません。青年心理学と多様性との相性は，良いはずだと思います。

筑波大学の青年心理学研究室が大会を担当するのは初めてでしたが，実は，準備委員会の事務局長である藤井 恭子先生が 2022 年に，伊藤 裕子名誉会員は 2011 年に，高木 秀明名誉会員は 2008 年に，齋藤 耕二名誉会員は 2001 年に，西平 直喜名誉会員は 1996 年に大会を開催しています。そもそも記念すべき 1993 年の第 1 回大会は，久世 敏雄先生が準備委員長で，都筑 学名誉会員の中央大学駿河台記念館での開催だったことをご存じの会員もおられるでしょう。

開催の役割を担った側からの感想を申し上げると，2 日間 100 名ほどのイベントでも，当日までの準備はお茶やポットやお弁当の手配まで細々とあります(活力源としてのお弁当は重要で，表には出ませんが宇井 美代子会員渾身のセレクト《白身魚のピカタ＆生姜焼き》でスタッフ一同パワーアップしました)。一通りの準備が出来上がった当日の準備委員長はそれほどでもなく，大会運営改革検討 WG(藤井 恭子会員，茂垣 まどか会員，溝口 侑会員)というセミプロ集団，学会事務局も兼ねる池田 幸恭会員，組織としての高いゼミ力をもつ髙坂 康雅会員をはじめとする強力なメンバーが活動してくれるので，すまして大会の華になっているうちにお開きとなったのでした。楽しい思い出をたくさんもらえたのは，30 年以上会員を続けてきたことへのごほうびと思っております。大会に参加してくださったみなさん，ほんとうにありがとうございました。

＜特集＞日本青年心理学会第 33 回大会

2025 年 12 月 6（土）・7（日），国立オリンピック記念青少年総合センターにて日本青年心理学会第 33 回大会が開催されました。

本大会は，前回大会の流れを受け，「多様性のその先へ」をテーマとして開催されました。青年をめぐる状況の多様化に応じて研究対象や方法は広がりつつも，「私たちの学会」という価値観を共有しながら，質疑応答や議論が交わされていました。若葉マーク企画やポスター発表など前大会までの取り組みも継続しつつ，クロージングセッションといった新たな挑戦もありました。大会準備委員会と大会運営改革 WG によるさまざまな配慮や運営上の工夫が，安心して議論に参加できる場を支えていたように感じられました。新たな試みを重ねながらも，共に考え，語り合うことを大切にする本学会の姿勢が感じられる大会の空気を，紙面を通してお伝えできれば幸いです。

ご執筆いただきました先生方に，心より御礼を申し上げます。

（担当：広報・ニューズレター編集委員　相羽 美幸・信太 寿理）

（大会参加者より）

初めての学会で向き合った「対話し難い悩み」
――青年の性をめぐって――

土屋 友美賀
（北海道大学大学院）

第 33 回大会においては，青年の性の悩みをテーマとした自主シンポジウムという形で発表をさせていただきました。私にとって本大会は初めて参加･発表した学会であり，このような貴重な機会をいただけたことに，まず心より感謝申し上げます。

私の場合，修士課程に進学する以前に，10 数年にわたり IT や人材開発の領域で仕事をしてきました。これまで社会人として，企業や各種イベントの場で話す機会は少なくありませんでしたが，学会という場は，一方向的に「伝える」場ではなく，問いや関心を共有しながら,「相互に学びを紡ぎ合う」場であることを，今回改めて実感しました。発表後の質疑応答や，他の発表者・参加者との対話を通じて，自分自身の視点や理解が揺さぶられ深まっていく感覚は，学会ならではの経験だったと感じています。

今回扱った「青年の性の悩み」というテーマは，正直に申し上げると，もともと私自身が専門的に深く取り組んできた領域ではありません。IT やデータ活用の実務経験を活かし，ウェブアクセス解析という観点から研究に参加し，学会発表の機会をいただいたことが，このテーマに向き合う出発点でした。しかし，実際に分析を進め，あわせてウェブサイトに投稿されたキーワードを分析するテキスト解析チームのメンバーと議論を重ねる中で，性の悩みが単なる情報ニーズではなく，青年期のアイデンティティ形成と分かつことのできない悩みであることを，私自身が理解していくプロセスを経験しました。

さらに，日々青年と向き合っている認定 NPO 法人 3keys の方々との対話を通じて，青年の悩み，とりわけ性の悩みがいかに表面化しにくいものであるかを実感しました。悩みが語られ，関係性が築けたのかなと思った矢先に，関係性が継続されず関わりが途切れてしまうことも少なくない。性の悩みを共有しながら在り続ける人間関係を築くことの難しさを，現場の実感として教えていただきました。同時に，こうした対話し難い悩みに，教育の中でどのように向き合うことができるのかという問いの重さも，強く意識されました。

今回の学会参加と発表を通して，問いの当事者として学び続ける立場に立たされたように感じています。青年の性の悩みという，表に出にくく，しかし極めて重要な問いに，今後も継続して向き合っていきたいと考えています。改めまして，本大会を準備・運営してくださった皆様，広報・ニューズレター編集委員会の皆様，そして対話の機会をくださったすべての方々に，深く感謝申し上げます。

日本青年心理学会第 33 回大会に参加して

滝口 達也
（北海道大学大学院）

先日の日本青年心理学会第 33 回大会において，シンポジウム「思春期『男子』の性――ウェブサイトに書き込まれた 10 代の性の悩みに注目して――」の話題提供者として発表させていただきました。今回が初めての学会参加・発表ということもありとても緊張しましたが，今後の自分の道しるべとなる貴重な経験となりました。

私の中で今回の学会を振り返ると，そこにはたくさんの「出会い」があったように感じています。参加者として先生方の研究発表やシンポジウムに触れる中で，自分の知らなかった分野について学ぶことができたことも,私にとって一つの「出会い」でしたし，

当日シンポジウムの質疑応答の際にいただいたご意見も，私に新たな問いを持たせてくれる「出会い」でした。また，シンポジウムを作り上げる中で目にしてきた10代の「声」一つひとつも，新たな気づきを与えてくれる「出会い」であったと感じています。こうした「出会い」は，私にとっての「研究」を問い直すきっかけとなりましたし，当事者の「声にならない声」とどのようにして向き合うべきかを考える機会になりました。まだまだ未熟な学生ではありますが，今後は，こうした貴重な「出会い」を大切にしながら，そのエッセンスを自分の研究につなげ，「オモシロイ」と感じられる研究ができるように精進していきたいと思います。

最後になりますが，今回このようなシンポジウムの機会を設けてくださった加藤 弘通先生と認定NPO法人3keys様をはじめ，ともにプロジェクトに邁進した発達心理学研究室の先輩・同期の皆様，当日は遅い時間にもかかわらず本シンポジウムにご参加いただき，貴重なご意見をくださった先生方・学生の皆様，そして今回ニューズレターに寄稿する機会をくださった広報・ニューズレター編集委員会の皆様に，心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

第33回大会で得た出会いと学び

古谷 かすみ
（愛知淑徳大学大学院）

日本青年心理学会第33回大会にて，「青年の片思いはネガティブかポジティブか？――心理的アウトカム指標の変化に着目した縦断的検討――」という題目で口頭発表をさせていただきました。本発表は愛知淑徳大学心理学部の先生方の調査データを用いた共同研究であり，代表して発表の機会をいただきました。丁寧にご指導いただいた髙野 恵代先生と久保 南海子先生をはじめ，大会関係者の皆様，座長を務めていただいた中尾達馬先生，そして大会中に関わってくださった皆様に，心より感謝申し上げます。

私にとって日本青年心理学会大会での口頭発表は2度目の経験で，発表中は終始緊張しておりました。発表を聞きに来てくださる方がいるのかと不安もありましたが，大会中に知り合った先生や他学会でご挨拶した先生方が会場にいらっしゃるのを見て，大変うれしく，とても励みになりました。質疑応答の時間では多くの方々からご質問やコメントをいただき，今まで自分で捉えきれていなかった視点で，青年の恋愛を考え直すきっかけとなりました。今後の研究にぜひ活かしていきたいと考えております。発表終了後にも数名の先生方からご挨拶いただいて，温かいお言葉を頂戴することができ，大会でしか味わえない貴重な経験をさせていただきました。今回発表した研究内容は，皆様からのご助言をもとに，ブラッシュアップした状態で論文などの形にしたいと考えております。

また，大会前日企画として若葉マーク企画にも参加させていただきました。昨年度の大会でご縁のあった先生方との再会や，新たな出会いを楽しむことができました。次回の企画にもぜひ参加したいと考えております。

若葉マーク企画を含めた3日間を通して，自分の成長を感じると同時に，未熟さを改めて実感する機会にもなりました。これからもこの“成長”と“反省”を糧にして，研究者として一層研鑽を積んでいきたいと考えております。

はじめての学会発表 顛末記
――日本青年心理学会第 33 回大会に参加して――

今野 優香理
（明星大学大学院）

今回のポスター発表の機会は，私にとって自身の行った研究について初めて発表する機会でありました。学会にて発表をするようにと指導教員に言われた際は，学部の卒業論文として行った，こんな稚拙な研究を学会という公の場に出すことなんてできない，と慄きました。研究対象が青年期に直面する就職面接についてであったため，本学会での発表を希望したのですが，どのように研究をまとめ，どの部分を強調して伝えるといいのだろうかと，はじめは全く手につかないような状態でした。また，ポスターを作成する際に大学院のゼミ内で検討を進めておりましたが，発表当日の 1 週間前になって，再分析が必要ではないかというご助言があり，直前で新たな分析も行ったり，前日まで大学院の先輩方と発表の練習や質疑について検討を行ったりというバタバタのスケジュールで，学会当日を迎えました。

実は懇親会への参加は当日の 10 分前まで参加するかどうかかなり迷っておりました。しかし，ここまで会場に残ってお金もすでに払っているんだからとりあえず受付に顔だけ出して，知り合い同士で固まっているようで輪に入れないようであれば，お手洗いに行く振りをして帰らせてもらおうと考えて向かっていました。実際に会場に向かうと，机ごとに分かれるカードが配られ，アイスブレイクのために青年から繋がる連想ゲームのようなものもあり，それらから話を弾ませることや，鰹節の削り体験などができ，本当に楽しい時間になりました。また，色々な先生が研究のことや将来のこと，青年のこと等についてお話をしてくださり，見識が深まるとともに次の日の発表に対しての不安も鎮まっていったのを覚えています。

次の日，発表の在席時間になるとやはり自分の発表に来る方は少ないのではないかという不安が出てきましたが，何名もの方が足を運びお話を聞いてくださり，新たな知見を得ることができました。またこれはシンポジウムも含めですが，質疑ではその分野で活動されている方だけでなく，会社員の方や学生の方も積極的に発言をされており，ベテランの先生方はもちろんのこと，若い世代の方の勢いが凄いなぁと，この上ない刺激をいただきました。何人かの方とは直接お話をすることができ，青年の特質について知り，それを他の先生方がどのように捉えていらっしゃるのかを知ることもできました。ポスター発表後のシンポジウムはとても気が楽になり，フラットな気持ちで参加ができ，そこでまたずっと不安を抱えたままであったことに気づき，その中でも発表ができたという達成感は，何事にも代えがたい経験でした。この場を借りて，大会委員長の佐藤 有耕先生をはじめとした運営の先生方，ご参加のみなさまには心より御礼を申し上げます。

＜名誉会員挨拶＞

私の研究歴

大野 久
（名誉会員）
（立教大学名誉教授）
（立教セカンドステージ大学統括特命教員）

2025 年度の大会で名誉会員に推戴されました。大変名誉なことと理事長の平石 賢二先生はじめ会員の皆様に感謝しております。思い起こすと大学院生時代から青年心理学研究会に参加し，1993 年日本青年心理学会が発足した年度に学会員になりました。院

生時代から数えるとすでに 45 年以上青年心理学会とともに研究してきたことになります。その間，西平 直喜先生，久世 敏雄先生はじめ数多くの先生からご指導と叱咤激励をいただきました。また，諸先輩方，同年輩の研究者，後輩達からも研究交流の中で大変刺激を受け，やっとここまでたどり着いたという思いです。

これまでの私の研究の主な流れを振り返ると，一貫してアイデンティティをテーマに研究してきました。最初に取り組んだのは，「健康なアイデンティティの実感としての充実感」の研究（大野，1984）です。これは修士論文を発展させたもので，青年の充実感とアイデンティティを測定する尺度を作成し，その得点の相関関係と尺度得点の時系列の安定性から，充実感とアイデンティティの関係を構造化したモデルを提出しました。この研究については 20 年後に共分散構造分析を用いて再分析し，20 年経ってもモデルの構造は変わっていないという普遍性，妥当性，信頼性に関する検証を行ないました（大野他，2004）。この論文からまた 20 年以上経過したので，現代における信頼性，妥当性を検証する研究を行ってもよいかもしれません。なお，充実感尺度はかなり頻繁に卒業論文や修士論文などで使用され，現在でも問い合わせがあります。

次に取り組んだのは，「アイデンティティのための恋愛」研究です。これは青年心理を講義する中で，恋愛の経験に関するレポートに青年期特有の傾向があること，その内容が，エリクソンの「時としてアイデンティティが不確定である青年期の恋愛は，親密性の発揮（愛情）よりも自己のアイデンティティを見つける手段に終始してしまう」（意訳）という指摘と符合していることについて，約 30 年にわたって学生から収集したレポートの分析を行い，その特徴，メカニズムをアイデンティティ理論および漸成発達理論から分析したものです（大野，2021）。この研究内容は青年期のみならず，現在，講義を担当している立教セカンドステージ大学のシニアたちからも昔の思い出を理解するのに有効という評判をいただいています。研究者とすると研究結果に時代を超えた妥当性があると考えられる現象で心強いです。

また，こうした研究を進める上で方法論についてもさまざまな試みを行ってきました。学部では西平 直喜先生から「量的データだけでは青年期の心理は把握できない。質的研究が必要だ」と指導を受け，大学院では久世 敏雄先生から「研究での主張は客観的なデータに語らせなさい」という指導を受けました。この二つの考え方を両立させるために悩んだ結果，オルポートの「人格研究は次元的方法（数量的方法）だけでは不十分であり，型態生成的方法（質的方法）によって補完されなければならない」（意訳）という体系的折衷主義の考え方に出会い，次元的方法，型態生成的方法双方の長短所について検討し，それを補完する方法をいくつか提案しました（大野，2011，2013）。

さらに，エリクソンから西平先生と受け継がれてきた伝記分析を立教大学の院のゼミで継承し，25 年間のゼミでの成果を大野他（2023）にまとめました。西平先生の提唱した方法論を発展させ，独自の伝記分析の方法論として確立させました。この研究法は様々な人物の人生を机上で追体験できる純粋に面白い研究で，エリクソンが提唱したアイデンティティの機能，漸成発達理論の成り立ちがわかるだけでなく，人間そのものの理解に迫ることができる研究だと思っています。ちなみに現在でも全国の研究者と Web による楽しい研究会を続けています。

最後に，生涯発達心理学の終着点として，魂理論について最近講義を行っています。その内容は，学会のニューズレター第 88 号で紹介しました（大野，2022）。大学院生時代から霊魂，前世の記憶，死後の世界に関する記憶，輪廻にまつわる現象について興味を持ち，書籍を集めていたのですが，驚いたことに 21 世紀になってこうした現象に科学的に否定できない客観的な証拠が示されてきたという話です。まだ完全に科学的に検証されたわけではありませんが，近い将来検証される可能性が充分に出てきました。また死後の世界の実在と霊魂の存在を信じるようになると，生きる意味も変わってきますし，亡くなった方への喪の在り方も変わってきます。この内容は立教セカンドステージ大学と東京都の看護師の研修会で話しているのですが，想像以上に評判が良く，亡くなった方との人間関係，自分の生き方，看護の世界ではターミナル・ケアなどを考える上で役立つ考え方として受け入れられています。

名誉会員になった現在でもまだやり残していることがいくつかあるような気がしています。これからも学会の発展のために努力して行きたいと思いますのでよろしくお願

いします。

引用文献

大野 久 (1984). 現代青年の充実感に関する一研究――現代日本青年の心情モデルについての検討―― 教育心理学研究, *32* (2), 100-109.
大野 久 (2011). 量的研究と質的研究の長短所と補完的折衷――体系的折衷調査法の提案―― 岩立 志津夫・西野 泰広(編) 研究法と尺度 (pp.174-185) 日本発達心理学会 (編) 発達科学ハンドブック 2 新曜社
大野 久 (2013). 青年心理学研究の方法論 日本青年心理学会 (企画) 後藤 宗理・二宮 克美・高木 秀明・大野 久・白井 利明・平石 賢二・佐藤 有耕・若松 養亮 (編) 新・青年心理学ハンドブック (pp.26-37) 福村出版
大野 久 (2021). 「アイデンティティのための恋愛」研究と方法論に関する理論的考察 青年心理学研究, *33* (1), 1-20.
大野 久 (2022). 超越的アイデンティティと魂理論 ＜特集＞青年と「異世界」 日本青年心理学会ニューズレター, *88*, 5-7.
大野 久・三好 昭子・茂垣 まどか・赤木 真弓 (2023). アイデンティティ研究のための伝記分析――生涯発達の質的心理学―― 福村出版
大野 久・茂垣 まどか・三好 昭子・内島 香絵 (2004). MIMIC モデルによるアイデンティティの実感としての充実感の構造の検討 教育心理学研究, *52* (3), 320-330.

＜学会賞受賞者挨拶＞

第 12 回学会賞を受賞して

大谷 宗啓
(滋賀大学)
(兵庫教育大学大学院)

この度は，第 36 巻第 1 号掲載論文「大学生・成人の心理社会的発達と同性友人関係における対象切替・自己切替・対人ストレッサー経験頻度の関連――対象切替と自己切替の交互作用に着目する必要性――」を栄えある学会賞にご選出いただき，まことにありがとうございます。受賞論文では，心理社会的発達の達成感覚に対する，対象切替（状況に応じて一緒に活動する友人を切り替えること）×自己切替（状況に応じて自己概念，キャラを切り替えること）の交互作用を検討しました。この研究テーマでは，受賞論文以前に本学会の年次大会で 4 回，関西地区青年心理学研究会で 2 回の口頭発表を行っています。そこでの対話，および，それを契機とした交流のもとでいただいた，ご助言，ご示唆の数々が，受賞論文には詰まっています。これまでご関与いただきましたすべての皆様に，厚く御礼申し上げます。

加えて，直接御礼申し上げることがかなわなくなった先生方への感謝をここに記させてください。中間 玲子先生には，私の質疑内容に合わせて先行研究をご紹介いただきました。上長 然先生には，行動とスキルのどちらに焦点を置くのが研究目的に適うのか，それはなぜかを問い直す機会をいただきました。坂口 哲司先生には，「君の研究が青年期の友人関係研究であるというのは納得できない。しかし対人関係の研究というのであれば納得できる」とのお言葉をいただきました。当時の私は大層落ち込んだものですが，あのお言葉を受けて考えたことが，研究の骨組みを太くしました。伊藤 裕子先生には，お会いするたび，「丁寧にしようとするのはあなたの美点でもあるけれども，それで仕上げられないのはダメ。早く論文にしなさい」と叱咤激励していただきました。

学会賞をいただいた翌日の大会 2 日目，この研究テーマで 5 回目の口頭発表に臨みました。これからも愚直に，そしてもう少し早く，研究を進めていきたいと思います。また，私が多くの方々にお助けいただいてきたように，私も誰かのお役に立てる対話者で

ありたいと思います。今後とも，どうぞよろしくお願いいたします。

＜リレー連載「日本青年心理学会（青年心理懇話会，青年心理学研究会）の歴史」　連載第 8 回＞

出会いの契機としての青年心理学もしくは日本青年心理学会

齊藤 誠一
（大阪信愛学院大学）

1979 年 4 月に東京学芸大学大学院修士課程に学部より進学。指導教員は学部 3 年次たまたま友人に誘われて入ったゼミの藤原 喜悦先生。その頃，藤原先生は，青年理解の新たな試みとして，指導観察的アプローチの実践研究を進めており，毎週月曜に研究会を行っていました。当時研究室のお世話役が松下 美知子先生，研究会には五味 義夫先生や小宮山 要先生も参加していました。あるとき研究室からの帰途，後ろから藤原先生が追いかけてきて，「西平君が来たから，戻ってきなさい～」と声をかけられ，西平 直喜先生との出会い。1979 年の金沢大学での日本教育心理学会総会時に開催された青年心理学研究会の宴席に事情も知らずに同席したものの，どうもこの会をどうするかといった少しシリアスな場であったようでした。修士課程修了後は行く場もなく，筑波大学を目指して浪人生活を送っておりましたが，松下先生から紹介されたバイト先でまだ幼児研究をしていた都筑 学先生との出会い。

1982 年 4 月に筑波大学博士課程に進学し，指導教員は加藤 隆勝先生で，ひたすら調査法とデータ分析を学びました（院生室で割り当てられた机は前年まで都筑先生が使っていたという偶然）。加藤先生も年数回研究会を開いており，そこでは齋藤 耕二先生，落合 良行先生，高木 秀明先生との出会い。その年の冬の集中講義で久世 敏雄先生が来られ，久世先生流の青年心理学を学びました。1984 年の大阪大学での日本心理学会大会で共同研究を発表した折，最後部席から執拗なまでに質問する若い人がいました。白井 利明先生でした。この年は後藤 宗理先生が筑波大学に内地留学で来られて，いろいろと交流ができました。

1985 年 12 月に上越教育大学に助手として就職。青年心理学の研究環境はなく，青年心理学研究会に刺激を求め，1990 年 4 月に神戸大学に異動するまでに，京都と東京での研究会で発表した記憶があります。前者では量的研究の弱点を反省した上で，質も量も必要であると伝えたつもりが，ニューズレターでは量的研究に偏っていると批判され，ショックと怒り。後者では会場へ向かうエレベーターで古澤 頼雄先生にいきなり出会い，「実は先生の後任で 4 月から・・・」と挨拶。神戸大学では関 峋一先生が上司，はじめて参加した関西青年心理学研究会では秋葉 英則先生に「ようこそ，お待ちしていました」と言われ，感激。以来，関西での約 37 年間に多くの青年心理学研究者との出会いに恵まれ，これは青年心理学もしくは日本青年心理学会が作ってくれたように思えます。

小さな学会だからこそある出会い→顔見知り→広がる関係，どんな方法やスタンスであっても話を聞いてくれる寛容さなど，学会は大きくなってほしいものの，残してほしい良さもあります。とはいえ，これも「昔はよかった，今はね・・・」という高齢者の決まり文句かもしれませんが。

＜書評・私のおすすめ，この一冊＞

『恋愛と結婚の心理学――恋愛心理学研究の現在地――』
髙坂 康雅（著）　福村出版（2025 年刊）

相羽 美幸
（東洋学園大学）

本書は，2016 年に刊行された「恋愛心理学特論」の改訂版として企画・執筆された恋愛心理学のテキストである。全 15 章で構成されており，一般的な 90 分×15 回の授業で利用しやすい構成となっている。また，各章の最後に，その章の内容を踏まえたレポート課題が 2 つずつ提示されており，授業の事後学修のための課題としても使える仕組みになっている。

まず，本書を読んで最初に感じたのは，「はじめに」でも述べられているように，その内容がさまざまな心理学の視点から網羅的に構成されていることである。恋愛研究者は，社会心理学をベースとしている者が多いこともあり（私自身，そのうちの一人である），これまでの恋愛に関する専門書は社会心理学的視点で書かれていることが多かった。一方，本書は社会心理学のみならず，発達心理学や臨床心理学の領域での恋愛研究についても詳しく紹介されている。第 15 章において著者も指摘しているが，恋愛はさまざまな心理学の領域と深く関わる現象である。一つのトピック（例えば，失恋，浮気など）を複数の領域からの視点で捉えることで，心理学を学ぶ学生にとって，多角的な見方で学びが深まるだけでなく，今まさに恋愛を経験中の当事者としても，自身や恋人を見つめ直すきっかけになるであろう。

また，巻末の引用文献欄を見てもわかるとおり，紹介されている文献数が非常に膨大である点に驚かされた。著者の専門領域である青年心理学だけでなく，国内外の他領域の心理学の論文，さらには公的機関や企業の実態調査の報告書に至るまで，本書の内容はすべて実証データに基づいて構成されている。私自身，こんな調査や研究があったのかと初めて知る情報もあり，大変勉強になった。本書は恋愛心理学を学ぶ学生向けのテキストという位置づけではあるが，恋愛研究者にとっても学びの多い書籍であると感じた。恋愛研究に興味のある方たちに，ぜひ手に取ってじっくり読んでもらいたい一冊である。

＜広報＞

広報・ニューズレター編集委員会からのお知らせ

日本青年心理学会では，会員の相互交流や情報交換の目的で，年 3 回ニューズレターを発行しております。会員は記事の投稿・寄稿および特集テーマや書評などの提案をすることができます。また，ご専門や経歴，最近の掲載状況などを考慮して，広報・ニューズレター編集委員会から記事の執筆をお願いすることがございます。投稿・寄稿をご希望の会員，および委員会から執筆をお願いする会員には，「執筆のお願い」「フォーマット」をお送りします。

＜特集＞
特定のテーマについて，複数の著者が執筆します。年次大会や委員会企画の特集があります。

＜書評・私のおすすめ，この一冊＞＜書評・映像作品ほか評論＞
会員が執筆した書籍や青年心理学に寄与する書籍についての評論です。学術書籍に限らず，文学作品，コミック，ホームページ，映像作品なども取り上げています。

自薦・他薦を問わず，投稿・情報提供をお待ちしております。
＜広報＞
学会事務局や委員会からのお知らせが掲載されます。また会員に周知したい情報を掲載することもできます。
＜会員から＞
会員からの情報や意見を投稿することができます。
＜その他＞
上記以外の記事です。

■執筆・投稿・寄稿についてのお願い
1. 掲載された記事の刊行に関する著作権は日本青年心理学会に属します。記事の執筆者としての著作権は，そのまま寄稿した執筆者に属します。
2. 原稿料については進呈しておりません。ご了承ください。
3. 原稿の内容については初出のもので他の学会誌・学会紙などに掲載予定がないものとしてください。再掲や転載などの内容の掲載を希望する場合はご相談ください。
4. 提出された原稿の校正はありません。編集の都合上，若干の修正を行うことへのご了解をお願いします。特に日本青年心理学会ホームページに掲載しますので，執筆者および学会にとって，誤解や不利益が予想される表現等は修正などのご提案をすることがございますのでご了承ください。
5. 執筆においては，文献や資料などの適切な引用を行ってくださいますようお願い申し上げます。同じく個人情報の保護には十分にご配慮ください。
6. その他のご質問やご要望はご連絡を差し上げた担当委員または広報・ニューズレター編集委員会までご遠慮なくお寄せください。

日本青年心理学会　広報・ニューズレター編集委員会
jsyap-nec@googlegroups.com

事務局からのお知らせ

■第 34 回大会のお知らせ
第 34 回大会（2026 年度）は名古屋で開催されます。

・ 日時：2026 年 11 月 28 日（土）－ 29 日（日）
・ 場所：名古屋市千種区不老町
名古屋大学東山キャンパス　教育学部本館
https://www2.educa.nagoya-u.ac.jp/

開催校は名古屋大学（平石 賢二大会準備委員長）です。大会の情報は随時，Web サイト（https://www.jsyap.org/annual-conference）やメーリングリストでお知らせいたします。ふるってご参加ください。

■事務局が 2025 年 4 月 1 日から変わりました
事務局を和洋女子大学（〒272-8533　千葉県市川市国府台 2-3-1）へ移転しました。郵便局の振替口座や E-mail（seinenshinri@gmail.com)の変更はございません。

■会員管理システム JPASS（ジェイパス）における「会員相互検索」機能について
会員管理システムは，2025 年 4 月から JPASS に変わりました。JPASS は公益社団法人日本心理学会が運用してきた会員管理システムを他学会でも共同利用できるようにしたものです。

「JPASS マイページ」では，オンラインでの年度会費の支払い，会員情報の自己管理，支払い等に関するデータの確認ができます。

2026 年 1 月下旬から JPASS における「会員相互検索」の機能を導入しました。JPASS の「マイプロフィール」にて，「会員相互検索」での各項目の公開可否を選択できます。各項目の公開可否について，必ずご確認ください。

JPASS にログインできない場合には，学会事務局へお問い合わせください。

【参考】「会員相互検索」機能の紹介

・初期設定について

各項目の公開設定は，初期設定ではすべて「非公開」に設定されています。ご自身で設定を変更しない限り，意図せず個人情報が公開されることはありません。

ただし，本学会が JPASS に参加する 2025 年 4 月より前に，他学会で既に JPASS を利用されていた場合については，あらかじめ設定していた「公開設定」が本学会でも引き継がれますので，留意してください。

・表示・検索項目について

氏名・会員種別は必須表示となります。

その他の項目（メールアドレス，住所，所属機関，学歴等）は，ご自身で「マイプロフィール」から個別に公開・非公開を選択可能です。

・その他の項目について

現時点の仕様では，各学会独自の項目を表示・検索することはできません。本学会では，「専門分野」「関心テーマ」「心理関係の資格」が独自項目に該当します。

■学会メーリングリストをご活用ください

現在，ニューズレターや大会・研究会などの案内を，学会メーリングリストによって配信しています。会員であれば，青年心理学に関する研究会や講演会・シンポジウムなどの案内を，このメーリングリストを用いておこなうことができます。セキュリティの関係上，事務局からの発信のみとなりますが，どうぞご活用ください。

日本青年心理学会事務局
Japan Society of Youth and Adolescent Psychology
E-mail：seinenshinri@gmail.com
Website：https://www.jsyap.org
振替口座：00940-6-273417
口座名称：日本青年心理学会

お問合せはできるだけ E-mail でお願いいたします。